



同志社人物誌 (65)

和田琳熊 父、和田琳熊を語る

和田 洋一

1

わたしの祖父、和田^{りょうすけ}梁亮は長州藩の士族であつたが、塾を開いて宇部^{りょうすけ}村の若者たちに孔子さまの道を教えていた。父、琳熊^{りんくま}は小学校を卒業すると、家を離れて県庁の所在地山口市の山口中学で学ぶことになり、クラスメートには、のちに小説家として有名になつた国木田^{くにた}独歩がいた。ふとしたことから山口教会にかようなことになつた一六歳の琳熊少年はキリスト教の魅力に捉えられ、洗礼をうける気

になつた。

しかし、儒教で固まっている父親に相談してみても、承認がえられるはずはないと思ひこみ、一六歳の少年は悩んだあげく、こつそりと山口教会で洗礼を受けた。そのことが耳に入つたとき、祖父は腹をたてたが、長男が病死した直後に、次男琳熊を勘当するわけにもいかず、琳熊はそのまま山口教会の教会員におさまってしまった。祖父はついで病死し、家督相続者になつた父は、山口中学、山口高等学校を卒業すると、さらに東京におもむき、帝国大学文科大学の哲学科に入学した。後年、

父琳熊は、青年になりかけたわたしに、「哲学というものがどんな学問やら、判らないまま哲学科を選んだ。親友の笹尾衆太郎（のちに東北学院大学の哲学の担当者になつた人物）が熱心に、命令的に哲学科をすすめたので、さからわなかつた。」と苦笑しながら語つたことがある。

哲学科三年生のとき、父は日記に「自ら哲山と号す。余に哲学の志あればなり」と記している。父は年をとつても哲学を大切にすゑる気持をもつていたが、ドイツ哲学、特にヘーゲルの哲学は苦が手であつたらしく、その結果アメリカ哲学、プラグマティズムの方へ、心理学、倫理学の方へ傾いていったということは、まずまちがいなさそうである。

ゼミナールのテキストはヘーゲルの『エンチクロペデー』だつた。そして指導教授は、ラファエル・ケール先生であつた。ケール先生は哲学科の学生の中にキリスト教徒が入つてきたということで、大変歓迎してくれしたが、父は後年『エンチクロペデー』は難解で閉口したとわたしに語っていた。

同志社の創立者新島襄が大磯で客死したのは、一八九〇年（明治二三年）一月二三日で



東京市教育会付属英語教員伝習所で英語を教えていた頃

住居は同志社のすぐ近く、室町通り武者小

それは一九世紀がおわって、二〇世紀が新しく始つた年の四月であつた。父はその前の年に山口教会で、石州津和野のクリスチャン女性磯江衣子と結婚式をあげていて、若い夫婦二人で京都へやつて来たのである。

路に定め、教会は同志社教会ではなく、日本基督教会派の室町教会に決めた。
官尊民卑の風潮は日本中いたる所にあつて、東京帝国大学を出たというだけで父は、二九歳の青年であつたにもかかわらず、同志社普通学校、同志社専門学校、同志社女学校などの教頭に任ぜられ、室町教会では長老の職に任ぜられた。父は室町教会の懇親会のとき、「自分はせいは低いし、年は若いのに長老にされてしまった」と冗談を言つたそうであるが、同志社では、社長が名目的には諸学校

あつた。新島のよき協力者であつたジエローム・デイヴィスは、新島の死の直後に『新島襄先生之伝』の執筆を始め、日本語に翻訳され、そして大阪福音社から出版されたのは一八九一年（明治二十四年）であつたが、どういうきっかけがあつたのか、東京帝国大学のクリスチャン学生和田琳熊は、この本を手に入れた、日記に「新島襄先生の伝を読み、感ずる所多し」と記している。父と同志社との関係はこのときに始まつたのであるが、それから二年後、京都の同志社から、東京帝国大学哲学科の教授であつた中島力造に、若い卒業生を一人同志社へよこしてくれという依頼状を出した。創立直後の同志社英学校で、新島襄

の教えを直接受けた中島力造と、もう一人の元良勇次郎は、それぞれ同志社英学校中退後、アメリカの大学で学び、東京大学の教授となつたのであるが、同志社は元良ではなく、中島に依頼し、中島は和田を呼んで、同志社へ行く気はないかと訊いた。父は京都の街には何の縁故もなかつたが、すでに『新島襄之伝』を読んでおり、それに同志社はプロテスタント系の学校であるから、アルコールを懇親会の際に強要されることもないだろうと思つて、ゆきますと答えた。



結婚当時

の校長を兼ね、実質的な校長の仕事は、全部教頭がやる慣例になっていて、女学校にはミス・デントンという気の強い、アメリカ人の先生がいて、若い教頭はさんざん悩まされ、ついに原田助^{ナキ}社長に明治四十年三月二六日付で、辞表を呈出し、純粹に教えるだけならよるこんでやりますが、教頭は何が何でもやめさせてもらいたいと願いだした。そのときの辞表は、どういうわけか、現在わたしの手もとに保存されている。

父は別に行政的手腕があつたというわけではなく、学歴がいいということのために、教頭の雑務をまたしても押しつけられ、そんな中で、ドイツ哲学ではなしにアメリカ心理学の勉強に力を入れ、倫理学だとか教育学の講義ももたされていた。

2

官尊民卑の風潮のために、戦前戦中の私立学校同志社にとめる教職員は、どんなにつらい思いをしたことか。まず第一に、同志社には定年退職制があつたが、恩給、年金制はなかつた。官立学校の教職員は定年後の生活



前列左から妻衣子、次男虔二、母琴子、四女とし、三女すま
後列左から長男洋一、琳熊

いというのは、定年退職後も講師の仕事を受け、講師謝礼という形で毎月かなりの額を支給するというやり方である。父は敗戦の前年の夏七三歳まで生きていたが、死の直前まで教え、死の直前までお小づかいにこまらなかつた。二人の娘（わたしの妹）は、色いろと心づかいをしてくれ、次男のつれ合いは、夫（わたしの弟）を戦争で亡くし、三人の子供をかかえながら、義理の父のため毎月定額の補助をしてくれ、長男のわたしはドイツ語のほん訳で金まわりがよかつたので、父は、こんなにふところがあたたかいのは、長い人生で今が始めてだといってにこにこしていた。

同志社には定年退職後の生活保証がなかつ

もちゃんと保証されていた。

同志社で定年まで働いて、そのあと何にもないというところで、ある老先生（わたしの同志社中学時代恩師）は家の中で声をあげて泣かれたという。

わたしの父の場合は、現役時代に色いろ要職についたということもあつて、同志社当局は特別扱いをしてくれたようである。特別扱



ベルリン大学留学中の頃



文学部の教授と学生、二列目左から3人目が原田 助社長、右はし和田琳熊

たほかに、年末のボーナスもなく、夏のボーナスはおさらなかった。敗戦後は教職員組合のおかげで、官民の差はだいぶんちじめられたが、父はそんなにみじめな思いをせずにするだのは、幸運と言えば幸運であった。教会にかんしては、室町教会が父にとって主であり、同志社教会は従であった。室町教会の人たちは、日本基督教会派こそ本物のキリスト教で、組合教会派なんかいいかげんなキリスト教だと見なしていた。室町教会の高善一という牧師は、和田琳熊長老のキリスト教はプラグマティズムで、本物のキリスト教ではないと言って批判していたが、個人的に差しつかえのあるときは、説教を和田長老にたのんでいた。父は同志社教会からも頼まれて、年に一回か二回、説教をしたり、祈禱会の奨励をしたりしていた。唯物論の側からの攻撃に対して、キリスト教を擁護することには熱心であったけれど、キリスト教の教義にかんしんしては頑固な所がなく、そのへんが室町教会の日高牧師にとって物足りなかつたのであろうと思う。

3

敗戦の翌年、同志社大学は、治安維持法違反だとか、同志社理事會との対立などのため辞表を呈出し、同志社を去っていった者に、文書で復帰を勧めた。

復帰した者は意外にすくなく、法学部へ高橋貞三、予科へ和田洋一、しばらくして経済学部へ住谷悦治、この三人がもどつたに過ぎなかつた。多数の者は、すでに同志社の外で職をもっていたということがある、復帰を勧める文書が無礼だと言つて怒っている人も二、三いた。

同志社教職員組合連合が新たに設けられ、高橋貞三は連合の委員長に、和田洋一は副委員長に選ばれ、従来お互い何の関係もなかつたのが親しく話をする機会をもつようになつたが、高橋貞三は同志社大学法学部の卒業生だつたし、戦前法学部の助手、講師などを勤めたこともあるので、文学部の老教授和田琳熊についても一通りのことは知っていた。彼はわたしに次のようなことを語つた。

「和田琳熊先生と君とは親子の間がららし



前列左から、村岡景夫助教授、浜田与助教授、本宮彌兵衛教授、大塚節治教授、和田琳熊教授、高阪正顕講師

いが、相互に、これほど似ていない親子も珍しい。顔が全然似ていない。からだのつきりも似ていない。君は中肉中背だし、琳熊先生は小柄である。琳熊先生は敬虔なクリスチャン、物しずかな先生であるのに、君は左翼がかつていて、鬭争的でもある。琳熊先生は、アメリカ人宣教師と英語ですらすらと話しておられるが、君は英会話は得意ではないらしいし、日本語もどもりながら話す、琳熊先生はスポーツの愛好者ではなかったが、君は学生時代に中距離ランナーだったと言うし、現在水上部（ボート部）の部長をやったり、ラグビー・ファンだということである。親子でありながら、相互にこんなちがう親子は珍らしい」

そう言われて、わたしは「なるほど」と思った。父は筆をもたずと上手に字を書くし、わたしは悪筆を自認していた。父は女性的で、台所へしばしば顔を出し、母を不愉快にさせた。こまかい所に気がつきすぎる、と言ってわたしの母はこぼしていたが、わたし自身は特に女性的でも男性的でもない。わたしは台所へ出ていったりはしない。なるほど高橋貞三さんの言った通りかもしれないと思う。

父は日本式を愛せず、日本のタタミ、日本のキモノ、日本食を好まず、洋式なら何でもいような所があった。

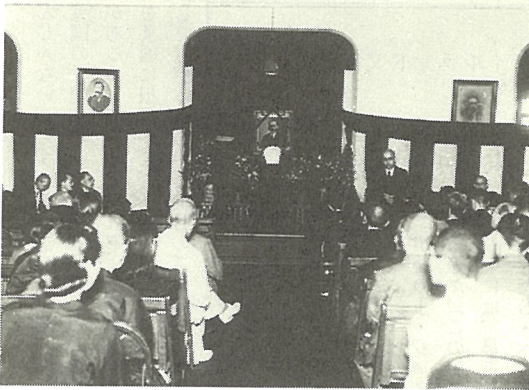
父は二度、外国留学の機会を同志社からあたえられた。一度は同志社へ就任後四年目、ニューヨークのコロンビア大学、ユニオン神学校で一年学んだ。このときの生活は父にとって実に快適であつたらしく、二度目はベルリン大学に一年間留学した。シベリア鉄道で帰国したとき、わたしは神戸駅へ迎えにいっただのであるが、駅頭で握手をした父の元氣はつらつにびっくりし、父は西洋の風土に適しているのだ、日本へ帰って生活をつづけているうちに、またくすんだような顔色になるのだろうと思つたが、果してその通りになつた。

父は住居を下鴨に新築するときも、自分で設計し、書斎や応接室はタタミを用いないで、板の間にしていた。長男のわたしはどう考えても父のような西洋主義者ではない。

さいごに、父の学問的業績にかんしてひと冊ぐらいあつてもよかりそうなものだったが、ついに書かずじまいであつた。同志社の教師に就任したのは一九〇〇年の四月、さい

この授業は一九四四年の七月であるから、四四年とすこし教壇に立つたということになる。そのうちの半分以上は同志社中学、普通学校、専門学校、女学校の教頭、でなければ文学部長、学長事務取扱、学長の地位をあてがわれ、そのために著書がなかったという同情的な見方もできるが、翻訳の仕事にかんしては、いやではなかったらしく、ベルリン大学の自由主義的神学者アドルフ・ハルナツク教授の『基督教の真髄』を一九〇四年にドイツ語から訳したり、アメリカの心理学者スタンレー・ホルルの『青年期の心理及び教育』を訳したり、同じくホルルの『一心理学者の見たる基督』を訳出したりした。

『一心理学者の見たる基督』は、父にとつてのさいこの出版物であつて、出版の時期は日本軍の真珠湾攻撃の前の年であつた。日米戦争のさなか、イエス・キリストのことを書いた本など売れるはずはないとわたしは思ったが、父は東京の本屋の店先へならべておけば売れるかも判らないと言つたので、わたしは一〇冊もつて東京へ帰り、神田の店にならべた所、一〇冊全部売れてしまつて、本屋の主人が、この本は売れますから、もつともつ



クラーク館二階講堂での告別式 (1944年7月31日午後3時開会)

てらっしゃいという。それで京都へその由を通じ、さらに一〇冊送りとどけられた本を神田の本屋の店さきにならべると、またきれいに売れてしまつた。

日本の国がほろびかけているのに、『一心理学者の見たる基督』などという本が、どうして売れるのか、わたしは不思議でたまらなかつた。

つたが、父にとつては思いがけない朗報であつたにちがいない。

東京神田のグッド・ニュースを聞いて、父はまもなく天にのぼつた。告別式は同志社大文学部の主催、場所は神学館の講堂で、とり行なわれた。父は哲学科の同僚だつた浜田与助さんに、「自分が同志社へ来たのは、お嫁に来たようなものだ」と言っていたさうである。ちよつとや、そつといやなことがあつてもやめないというつもりだったのであろうが、死の直前まで四四年間教えさしてもらったのだから、感謝して天国へ行つたのだろうとわたしは思っている。

(大学名誉教授)